

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520637

研究課題名(和文)グローバル化時代に求められる人材育成のための教育方法に関する予備的研究

研究課題名(英文) Preliminary Study for Student's Development of Global Competencies in Higher Education

研究代表者

松本 久美子 (MATSUMOTO, Kumiko)

長崎大学・国際教育リエゾン機構・准教授

研究者番号：70295111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、グローバル化時代に求められる人材育成のための方策として、短期海外語学研修プログラムと留学生との会話パートナープログラムを取り上げ、調査研究を行った。具体的には両プログラム参加者を対象として、3年間に渡り質問紙調査及び面接調査を実施、グローバル人材育成の観点からこれらのデータを分析し、その効果について検証を行った。分析の結果、両プログラム参加者とも、異文化理解、偏見の低減、積極性の向上等、その意識と態度に変容が見られ、特に会話パートナープログラム参加者においては異文化コミュニケーション能力の向上が顕著であった。また、2つのプログラムを連携させることによる相乗効果が確認された。

研究成果の概要(英文)：Colleges and universities in Japan have been trying to internationalize their curricular on campuses and also trying to send their students abroad to meet the needs of global society. This study examined undergraduate student's participation in short-term language study abroad program and on-campus international activity (Conversation Partner Program) in Nagasaki University. The survey was conducted from 2011 to 2013. The analysis of the survey, the both programs have the following features: 1) Participants are able to develop their personal growth; 2) Participants are able to develop global competencies such as cross-cultural awareness, openness, and positive attitude through cross-cultural dialogue and experience.

The results of this study suggest that student's participation in continuous interactions with international students for more than 2 semesters may yield greater perceived benefits than short-term study abroad for student's development of global competencies.

研究分野：日本語教育

キーワード：グローバル人材育成 大学の国際化 留学生交流

1. 研究開始当初の背景

現在、大学では国際競争力の強化とともに、グローバル化時代に求められる人材の養成がひっ迫した課題として挙げられ、大学の国際化と留学交流に関する大規模な調査(横田他 2006)も実施されている。しかし、留学生受け入れの数は伸びているものの、派遣の人数は近年減少傾向にあり、文部科学省は留学に消極的な大学生の「内向き志向」に対する具体的な対策として「ショートビジット(短期滞在)」制度を 2011 年度から開始することを決定した(この制度は予定通り 2011 年度に開始され現在も継続中である。)

本来受け入れと派遣は車の両輪であり、大学の国際化にとって非常に重要な要因である。しかし、現在の日本の大学の現状を見ると派遣学生数が全学生数の 1% に満たないところがほとんどである。留学受け入れ大国アメリカにおいても派遣では頭を痛めており、エラスムス・ソクラテス計画等様々な策を講じ、学生のモビリティを高めようとしている EU 圏内の高等教育機関においてさえ、派遣学生数は平均で 10% に達していない。このような状況の中、1998 年度 EAIE 年次総会において、SIG: Internationalization at Home が結成され、以後、大学及び地域の国際化に関する実践・調査研究が続けられている(Nilsson 2003, Paige 2003)。

派遣学生数を伸ばすために大学のシステムを改善し、より多くの学生が参加できるように留学プログラムを多様化させることは急務であるが、同時に、Nilsson(2003)等にも指摘されているように、留学しない大多数の学生に対する対策を講じる必要がある。つまり、通常は海外に留学することによって得られる効果を、現在在籍している大学においても得られるような制度が必要とされる。

これに類する既存の制度として、国立大学法人にはチューター制度があるが、この制度は基本的に留学生支援のためのものであり、

日本人学生に対する教育的効果は第一義とされていない。また、近年多くの大学で留学生と日本人学生の交流促進の必要性が目まぐるしくなり、日本語教育においても教室内外で日本人と実際のコミュニケーションを行う「日本語チューター」など実践例も報告されているが、これらは一般的にいわれる日本語教育の枠組みの中で行われている。一方、会話パートナープログラム、バディプログラム等と呼ばれるプログラムも存在する。長崎大学では、1998 年度に留学生と日本人学生の交流を通じた相互理解の促進と両者の異文化コミュニケーション能力の養成を目的として会話パートナープログラムが開設され、プログラム参加が日本人学生に与える影響に関する研究が継続して行われており、日本人学生にとって、留学生との交流活動が国際的な感覚を身に付けるとともにコミュニケーション能力の向上を図る等、様々な学びの場になっていることがわかってきている(松本 2001, 2003, 2009, 2010)。

本研究はこれらの研究成果を更に発展させ、会話パートナープログラムを「大学の国際化とグローバル化時代に求められる人材育成のための方策」の一つとして捉え直し、その効果を検証しようと試みたものである。これは、日本語教育、異文化理解教育、異文化コミュニケーション、国際教育交流に渡る学際的な研究であり、この観点からの研究はまだほとんど行われておらず、この分野に新たな方向性を示唆するものとして重要であると思われる。

2. 研究の目的

本研究では、留学生交流を通じた大学の国際化およびグローバル化時代に求められる人材育成という観点から、留学生交流推進の核となる学部教育レベルでの交換留学(派遣)促進のための方策及び教育方法(学生にとっては主体的学びの場)を提示すること、

その効果を検証すること、を研究目的とした。具体的には学内における留学生との交流プログラムである会話パートナープログラムをその具体的方策として取り上げ、海外短期語学研修（必修科目単位認定）プログラムと教育的配慮を持って連携させることにより、現時点では留学が難しい大多数の学生にとって、通常は海外に留学することによって得られる効果が現在在籍している大学においても得られるようなシステムを提示できるのではないかという観点から、両プログラム参加者に対する調査を3年間に渡って定期的に実施し、蓄積されたデータを分析することによって、その効果を検証しようとした。

3. 研究の方法

本研究は4年の期間を設けて行った。まず、海外短期語学研修プログラムと会話パートナープログラム、それぞれのプログラムの持つ教育効果とその特徴を明らかにするために、両プログラム参加者に対して、以下のような方法で調査を実施した。

- (1) 本研究代表者が実施担当である海外短期語学研修「韓国語」参加者（参加時点では学部2年生）全員に対して、研修参加前後に質問紙調査を実施するとともに、質問紙調査の結果を踏まえて、面接調査を実施し、そのデータ(3年間3回分)をもとに、グローバル人材育成の観点から研修の効果について分析した。また、Facebookにグループを作成し、グループ運営者の一人としてFacebook上での交流の参与観察を行った。（韓国語研修は本研究代表者が実施担当であり2007年から年1回実施。（松本2008））
- (2) 会話パートナープログラム参加日本人学生に対して、半期ごとに質問紙調査を実施するとともに、その結果をもとに面接調査を実施した。面接調査については、活動期間が半期の学生と数期に渡って会話パー

トナーを継続している学生を対象とし、両者を比較することで、留学生との継続的な交流の効果と学びについて分析・考察した。また、参加学生からの留学生との活動に関する報告メールも分析の資料とした。（3年間、6学期分の調査を分析資料とした。）

- (3) 1・2の調査結果をグローバル化時代に求められる人材育成の観点から比較・検討し、その共通点と特徴を明らかにするとともに、両プログラムを連携させることによる相乗効果について考察を行った。

4. 研究成果

(1) 海外短期語学研修「韓国語」参加者に対する調査結果

調査の結果、研修参加者は韓国語の上達に加え、韓国文化理解、視野の広がり等、様々な研修効果を実感していることがわかった。具体的には、「積極的に became」「文化の違いを肌で感じるようになった」「日本の文化を改めて見直すきっかけになった」「語学・生活両面で自信がついた」「問題解決能力がついた」「モチベーションの向上」「違いを受け入れることの大切さがわかった」「友人が増えた」「韓国が好きになった」「家族や友達の大切さがわかった」等が挙げられている。また、上記に加え、「韓国人に対するイメージの変化（マイナスからプラスへ）」についての記述が多く見られた。2011年度・2012年度研修とも竹島問題がマスコミに大きく取り上げられおり、特に2012年度は研修に参加するにあたって反日運動に対する不安を抱えている参加者が多数存在した。2012年度の質問紙調査では自由記述において18名中13名が上記のイメージの変化について述べており、トウミとの交流やキャンパス外での現地の人との出会いによってステレオタイプや偏見に関する気づきが生まれたことが記されている。また、研修前に比べ、留学へのモチベーションも確実に上がっており、研

修後の留学相談件数も増加している。

以上の結果から、3週間という短期の語学留学であってもグローバル人材に必要とされる素養を育成する一定の効果があることが示唆された。

(2) 会話パートナープログラム参加者に対する調査結果

2012年度から調査方法にPAC分析を加えているが、分析の結果、参加者の個々に内在する思いや意識変容のあり方が明らかになってきた。交流相手との関係性の構築を志向する傾向が強い場合、定期的な交流が継続するにつれて、その中で気づきや学びが本人の意識・態度の変容に顕著に表れることが示唆されている。交流を通して得た実感を伴った気づきと学びとしては以下が挙げられる。

ステレオタイプや偏見に関する気づき、視野の広がり、異なる視点・柔軟性(違いを受容)、コミュニケーションスタイルの変化、異文化接触場面におけるコミュニケーション能力の向上、前向きな考え方と積極的な姿勢(積極性の向上)自身の成長(自己変化)を実感

会話パートナーとして1年生の前期から活動し4年次まで継続した学生は次のように述べている。「交流していく中で、偏見がなくなったり、違いを受け入れるところが育ったり、あとは外国人との関わり方、どういう風に説明したらわかってもらえるのかってところを4年間通して学んだってことで自己変化かなって思います。」

会話パートナーとしての活動期間が2学期間以上の学生の場合、その多くが自分のパートナーだけでなく、他の留学生のことも気に掛けるようになり、留学生の立場に立って物事を考えるようになっており、受け身的な行動から自分から「相手を楽しませよう」という積極的な行動に変化している。また、「伝えたいことをきちんと言葉にして伝えるこ

との必要性」を実感し、留学生だけでなく日本人との人間関係にもそれを生かせるようになっていたことがわかった。つまり、日本人学生にとって会話パートナーとしての活動は留学生との定期的で継続的な交流を通じた主体的な学びの場(自己啓発の場)となっていると言える。

以上から、会話パートナープログラムが海外に留学しない(することができない)大多数の学生に対するグローバル人材育成のための手段として、またキャンパスの国際化のための一つの手段として有効であることが明らかになった。

(3) 連携による効果等

2つのプログラムを教育的配慮を持って連携させることによる相乗効果も具体的に示されている。1年次の会話パートナープログラム参加者で2年次に海外語学研修や国際交流活動、海外協力活動等に参加する学生数が増加している。1年次の経験を活かし、2年次以降、留学生のチューターとして活動するものが増加している。語学研修参加後、会話パートナーとして活動する学生が増加している。研修参加者で実際に交換留学生(1年間)として韓国の協定校へ留学した学生は、2011年度:3名、2012年度:3名、2013年度:1名となっている。これらの学生は、研修後、留学生の会話パートナーやチューターとして積極的に活動に参加していた学生たちである。

以上のように、会話パートナープログラムは留学経験者にとっての帰国後の受け皿であるとともに、派遣を促進する役割も果たしている。

(4) この研究課題によって得られた成果の一部は、「5. 主な発表論文等」に示したように国内外で発表した。今後の課題としては、会話パートナープログラム参加者に対する

活動開始前の意識調査とフォローアップインタビューを並行して実施するとともに、グローバル人材育成という観点から、プログラムの可能性とその有効性を引き続き検証しつつ、プログラム参加による効果をより多面的に分析するために、IDI(Intercultural Development Inventory)等、異文化間能力発達レベル測定ツールの応用を検討することがあげられる。

<文献>

松本久美子(2001)「会話パートナープログラム-留学生と日本人学生の相互理解に向けて-」『広島大学留学生センター紀要』第11号 pp.79-93

松本久美子(2003)「会話パートナー・ハンドブックの作成と改訂-留学生と日本人学生の交流・異文化理解促進の一環として-」『長崎大学留学生センター紀要』第12号 pp.27-40

松本久美子(2008)「学生交流と大学の国際化 海外短期語学留学プログラム「第1回韓国語研修」を一例として」『長崎大学留学生センター紀要』第16号 pp.97-110

松本久美子(2009)「留学生と日本人学生のための会話パートナープログラム」の10年を振り返って」『留学生交流・指導研究』Vol.11 pp.21-33

松本久美子(2010)「会話パートナープログラムの現状と課題-2009年度の運営状況から-」『長崎大学留学生センター紀要』第18号 pp.59-70

横田雅弘他(2006)「岐路に立つ日本の大学: 全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告」平成15-17年度科学研究費補助金(基盤研究B)「日米豪の留学交流戦略の実態分析と中国の動向: 来るべき日本の留学交流戦略の構築」研究成果報告書

Bengt Nelsson (2003) Internationalisation at home from a Swedish perspective: The case of Malmo. *Journal of Studies in International Education* Vol.7 no.1, 27-40

R. Michael Paige (2003) The American Case: The University of Minnesota. *Journal of Studies in International Education*, vol. 7, 1: 52-63

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

松本久美子(2014)「学生は短期語学留学参加によって何を得ているか-長崎大学韓国語研修を事例として-」『長崎大学留学生センター紀要』査読無、第21号22号合併号 pp.47-62

松本久美子(2012)「第5回韓国語海外短期語学研修実施報告-改正点に焦点を当てて-」査読無、『長崎大学留学生センター紀要』第20号 pp.39-46

松本久美子(2011)「韓国語海外短期語学研修の現状と課題-4年間の研修を振り返って-」査読無、『長崎大学留学生センター紀要』第19号 pp.35-42

[学会発表](計 2件)

松本久美子「留学生の会話パートナーとしての活動を通して日本人学生は何を得ているか」2014年日本語教育国際研究大会(SYDNEY-ICJLE2014) 2014年7月11日、シドニー(オーストラリア)

松本久美子(2013)「学生は短期語学研修参加によって何を得ているか 長崎大学韓国語研修を事例として」2013年度異文化間教育学会年次大会、2013年6月9日、日本大学文理学部(東京都世田谷区桜上水)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 久美子 (MATSUMOTO, Kumiko)
長崎大学・国際教育リエゾン機構・准教授
研究者番号：70295111

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

助川 泰彦 (SUKEGAWA, Yasuhiko)
東北大学・国際交流センター・教授
研究者番号：70241560